

1	司徒北平王 ^ノ 家 ^ニ 、猫有 ^リ 二生 ^{ンデ} 子 ^ヲ 同 ^{ジク} スル ^ヲ 日 ^ヲ 者 ^一 。
ア	司徒北平王の家に、猫子を生んで日を同じくする者有り。
イ	司徒北平王の家で(二匹の猫が)同じ日に子を産んだ。
2	其 ^ノ 一 ^{いつ} 死 ^ス 焉 ^一 。
ア	其の一死す。
イ	(二匹の母猫のうちの)一方が死んだ。
3	有 ^{リテ} 二子 ^一 、飲 ^ム 二於 ^ニ 死母 ^一 。
ア	二子有りて、死母に飲む。
イ	(死んだ母猫には)二匹の子猫がいたが、(子猫たちは)死んだ母猫の乳を吸っていた。
4	母且 ^ニ ルヤレ死 ^{セント} 、其 ^ノ 鳴 ^ク コト ^一 咿咿 ^{タリ} 。
ア	母且に死せんとするや、其の鳴くこと咿咿たり。
イ	その母猫は今にも死のうとするときに、弱々しく苦しげに(ニヤーにならないような声で)鳴いた。
5	其 ^ノ 一 ^一 方 ^{あた} 乳 ^{スル} ニ其 ^ノ 子 ^ニ 一、若 ^シ レ聞 ^ク ガ ^ヲ 之 ^ヲ 。
ア	其の一其の子に乳するに方たり、之を聞くがごとし。
イ	もう一方の母猫は、自分の子に乳をやっているちょうどその時に、(弱々しく苦しげに鳴く)その鳴き声を耳にしたようであった。
6	起 ^{チテ} 而 ^一 若 ^ク レ聴 ^ク ガ ^ヲ 之 ^ヲ 、走 ^{リテ} 而 ^一 若 ^シ レ救 ^フ ガ ^ヲ 之 ^ヲ 。
ア	起ちて之を聴くがごとく、走りて之を救ふがごとし。
イ	(そして、自分の寝床から)起きあがって注意深くその鳴き声を聞いている様子をし、(最期の声を出した母猫の寝床に)走って行って、(死んでもない母猫を)救護しているように見えた。
7	銜 ^{ヘテ} ニ其 ^ノ 一 ^一 、置 ^ク ニ于 ^ニ 其 ^ノ 棲 ^ニ 一。
ア	其の一を銜へて、其の棲に置く。
イ	(すると、生きている母猫は残された子猫のうちの)一匹を口にくわえ、自分の寝床に(運んできて)置いた。

8	又往 キテ 如 クス 之 カクノ 。	【「如」ひらがな(こと)】
ア	又往きて之くのごとくす。	
イ	(生きてゐる母猫は)再び(死んだ母猫の側に)行って、さっきと同じようにもう一匹の子猫も口にくわえて運んできた。	
9	反 リテ 而 スルニ 乳 レ 之 ニ 、若 ク 其 ノ 子 ノ 一 シカリ 然。	【「而」置き字 「若」ひらがな(こと)】
ア	反りて之に乳するに、其の子のごとく然り。	
イ	(生き残った母猫は自分の寝床に)戻って来て自分の子と同じように(母猫を亡くした二匹の子猫にも)乳を飲ませた。	
10	噫亦異之大 ナル 者也。	【「之」ひらがな(の)】
ア	噫亦た異の大なる者なり。	
イ	なんとまあ、たいへん不思議なことではないか。	
11	夫 レ 猫 ハ 人畜也。	【「也」ひらがな(なり)】
ア	夫れ猫は人畜なり。	
イ	そもそも猫というものは人に飼われている生き物にすぎない。	
12	非 ザル 性 アル ニ於仁義 ニ 一者 ニ 上 上 也。	【「於」置き字 「也」ひらがな(なり)】
ア	仁義に性ある者に非ざるなり。	
イ	慈しみの心と道理に合った心を生まれつき身につけている生き物ではないはずだ。	
13	其 レ 感 ズル ニ於所 ノ 畜者 フ 一 ニ 乎哉 カ 。	【「於」置き字 「乎哉」二字でひらがな一字(か)】
ア	其れ畜ふ所の者に感ずるか。	
イ	なんと飼い主である北平王に感化され(てこのように情け深くなつたのだなあ。	